

□ 書評 □

竹内二士夫(編)

竹内二士夫・粕谷大智・佐々木清子(著)

図説 リウマチの物理療法

—病院での治療から自宅療法まで—

東 威

(聖マリアンナ医科大学客員教授)

慢性関節リウマチ(RA)は、多発性関節炎による痛みと、関節破壊による機能障害により、患者の日常生活動作を著しく阻害する疾患である。その治療には内科的薬物療法、整形外科的手術療法、本書にある物理療法を含むリハビリテーションを、患者の病期、病状に合わせて適切に行うことが重要である。特に物理療法においては個々の患者に合わせたオーダーメイドの治療スケジュールが必要で、一律に行うことはかえって患者の病状を悪化させる恐れがある。そのような意味で病院から自宅まで、病状ごとの物理療法を示した「図説 リウマチの物理療法—病院での治療から自宅療法まで—」は、今までにない意図の下に作られたRA治療の解説書である。

慢性進行性の疾患であるというRAの性質上、治療は継続的に行われる必要があり、物理療法も入院中だけ、あるいは病院に行った時だけではなく、自宅で根気良く毎日続けることによって初めてQOLの改善をみることが多い。従来、RA治療においては内科的、整形外科的治療にくらべてリハビリテーション(物理療法)がやや軽く見られてきた背景には、病期、病状に合わせた治療計画の立て方が難しいことと、自宅での継続が困難な点があったと考えられる。患者にはやや専門的な部分もあるので、基礎知識なしに読んだだけで

完全に理解できるものではないが、医療チームが本書を使って説明することにより患者の理解が向上し、自宅での物理療法が継続されるようになることが期待される。

東京大学医学部物療内科は、RA患者に内科的治療だけでなく、鍼灸も含めた物理療法を併用している非常にユニークな診療科として有名である。編集の竹内博士はRAを含めた膠原病の基礎的研究の分野で著名な学者であるばかりでなく、診療面でも多くのRA患者を持ち熱心に取り組んでいるリウマチ医である。そして本書には医師である竹内博士のほか、物理療法の療法士、看護婦が共著者として参画している点も一つの特色である。そのために具体的な記述が多く、RA診療に携わる医師はもちろん、チーム医療の担い手であるコメディカルの人々にも利用され得る恰好のマニュアルとなっている。

内容は解説に始まり、病期ごとのリウマチ体操、病状ごとの自宅での介護と物理療法が続く。効果の評価法、薬物療法、手術の適応、付録として手技の解説、社会保障制度の紹介が付け加えられている。また関係箇所ごとに一口メモとして各療法の解説が入っているが、記述が簡潔で分かりやすく、これらはRA以外の診療分野においても役立つものと思う。

疾患の性質上、また医学的知識のない患者に分かりやすくするためにはやむを得ないことかもしれないが、あえて希望を述べれば体操の図などに繰り返しが多い点はもう少し工夫されても良かったかと思われる。この点を差し引いても、本書はRA患者の日々の診療に直ちに役立つ手引書として推薦されよう。

● B 5 128 頁 図 252 表 27 1998 定価(本体 3,500 円+税) 〒 400 医学書院・刊